



「声」の欄・投稿規定

- ★「声」の欄は読者の皆さんのお考えを、直接誌面に反映させるためのページです。皮膚病の診療に関する日ごろのご意見、新しいアイデア、ご提言などをお気軽にお寄せください。とくに日夜第一線で診療に活躍しておられる先生方からのご投稿を切望します。
- ★「声」の欄には、また皮膚病に関する“質疑応答”を取り上げます。お寄せいただいたご質問は、その方面の権威に依頼して適切な回答を用意し、誌上で発表いたします。とくに回答者を指名されても結構です。
- ★字数は一般のご投稿は1,200字以内、質問は600字以内を原則とします。
- ★ご投稿は郵送のほか、E-mail(アドレス:hs1979@intage.com)にても受け付けております。
- ★原稿には住所・氏名を明記していただきます。

南京虫の逆襲

先日テレビをみていたらトコジラミ(南京虫)の特集で、兵庫医科大学の夏秋優教授が解説されていた。海外旅行からのもち帰りが増えているそうで、海外の滞在先ではトランクと衣服をビニール袋に包んで南京虫がつかないようにするのがよい、と具体的な予防策まで指導されていた。海外からの旅行者の受け入れ再開後に都内のホテルでも発生しているという話は聞いていたが、まさかここまで拡大しているとは思わず、びっくりした。

トコジラミは名前にシラミとついているがシラミ亜目ではなくカメムシ科であり、通常は2個並んだ刺し口が特徴的である。海外では夜間就寝時に刺されるのでbed bugと呼称されるが、3個並んだ刺し口が「breakfast, lunch, dinner-sign」と呼ばれているのだそうで、これはクイズに使われるほど有名らしい。

さてこのトコジラミ、考えるといろいろ不思議な生物である。なぜカメムシなのに人を吸血するような進化を選んだのだろうか？ またなぜ刺し口は1カ所では済まないのだろうか？ どなたかが教示いただければ幸いです。

石川 博康
(八戸市・湊高台皮膚科)

【コメント】

トコジラミは現在、世界中に拡散、蔓延しており、旅行者の移動とともに宿泊施設内への持ち込み、定着、繁殖が大きな問題になっています。すでに海外のみならず、国内各地の宿泊施設でもかなり定着しており、国内旅行から帰宅後にもち帰ったトコジラミが一般住宅内で繁殖して家族全員が吸血被害を受ける事例も頻発しています。どんな高級ホテルでも、いつの間にかもち込まれたトコジラミが生息している可能性は否定できないのが実情です。トコジラミをもち帰らないために、荷物や衣類は寝具周囲に置かず、大きなポリ袋に入れて部屋の入り口付近に置くのが無難です。荷物類を洗面所に置いて照明をつけておくのもよいと思われます。

トコジラミ刺症における皮疹は、注入される唾液線物質に対するアレルギー反応によるものと考えられ、多くの場合は遅延型反応として現れます^{1,2)}。トコジラミは1回の吸血(平均で約15分間)の際に、途中で口器を刺し変える習性があり、その回数に応じて皮疹の個数が決まります。決して2カ所並ぶと決まてはいません。筆者の経験(吸血実験)では1カ所(刺し変えなし)が多く、2~7カ所の場合もありました¹⁾。実際の臨床像としては、狭い範囲に複数の紅色丘疹が並ぶのが特徴となります。

トコジラミは原始時代には洞窟で生活する人間と共存していたようですが、ほかの吸血性昆虫と同様、動物を宿主とする吸血性のトコジラミが進化の過程でヒ

トを対象とするようになったのではないかと考えられます。

現在、世界中に拡散しているトコジラミはピレスロイド系殺虫剤に対する抵抗性を獲得していますので、駆除するにはメトキサジアゾン（オキサジアゾール系）、プロポクサル（カーバメート系）やプロフラニリド（メタジアミド系）などを用いる必要があります。最新のトコジラミ対策については拙著³⁾や佐藤ら⁴⁾の文献をご参照いただければ幸いです。

夏秋 優

(兵庫医科大学皮膚科学教授)

〈文 献〉

- 1) 夏秋 優：Visual Dermatol 124：5, 2014
- 2) 夏秋 優：Dr. 夏秋の臨床図鑑 虫と皮膚炎 改訂第2版, Gakken, 東京, p124, 2023
- 3) 夏秋 優：Visual Dermatol 23：486, 2024
- 4) 佐藤俊次, ほか：日皮会誌. 41：77, 2024